



○怪譚 姫之於百序

出羽の國 秋田の大守佐竹右京
 大夫義澄公と云其頃東奥は
 威勢強く有時大船を新造あ
 り是を威日丸と号け其船頭ハ
 有名なる来名屋徳
 藏次大坂より
 招寄せ
 れ。

○善長 美を飾り
 頃八月十五日朝

津々浦々
 るも云々
 れぬ詠な
 り暮て
 仲秋の月
 然とて風
 兩起り小山
 の如逆浪の中
 見る三



更と見ると三
 丈余の怪物
 船の水先へ
 けるは
 是此編の
 山岸に着る是る海坊
 迎其怨恨来名屋を滅亡
 遂に領主へ仇をな
 〇発端
 な



阿
子

彼の海魔の美は百は付ま
とひ桑名屋徳藏と通い
本妻か初を屢譲一日々
の淫酒を負婦



あつ
てつ
こつ

初はつの諫いさも聞きき
今いまハせんかたなり
斗とりさつて行いく
方かたも米津河原

身を捨
るふ



ねろ
あつ



お百の兄漢夫新助ハ
 擲る獲物を曳網み
 たくらば初を救揚
 初て聞得し徳兵衛も
 百溜奔酒乱
 且具いかり
 且歎
 直は来名屋へ走
 行て投身の
 咄し西人ハ
 空吹風と聴

元来已て
 孤児なるを我父
 慈悲の余りより
 赤年養育せし
 恩を仇なる
 首終
 打聞
 お百の
 却て
 新助



流し新助ハ
 他人の新助
 我罵りて今ハ
 他人の新助
 可と暴若無
 意返

徳兵衛増々酒酒さゆりり遂に
家産を破り今ハ大坂にも住
兼て僅小路用を携ふ故郷へ去り
東をさして初旅の宿取をくま
夕まが九 袋井宿の松並木
さぞ差ける折二人
ハ賊も出合ひ



徳兵衛八谷
間へ深くけ



と見ろハお百を引
立果家を差て走去なり



山賊倉の丸
五右衛門
を透す

毘



可愛き余
憎さく増
て吐嗟と見えける其折
と海魔の姿現はれお百
て暫時前後も知らず有
が付て見れば徳兵衛が落
對居たりこそハ亦不思議

五右衛門
自の合

茲ハ名ニおゑ東
 海道三島宿の片傍
 リ足弱と見て徳兵
 衛お百を取困み種々
 なふぞ其何ぞく既
 手込まなさんと其勢
 はきなくも旅金を不
 残渡かたぎを平去たり



今ハ進退究リ
之徳兵衛



命の兩人
詮方尽き

阿
百

行ハな一は富井端

爰三余の川なふめと

互は小石を袂に入き泪ととも
覺悟の折江戸本石田新道の
赤峯と云旅人は不斗止め
れ志のみり金夷をも恵を受
江戸は着なハ必とも心置なく
尋ふれよといと心切なる此者ハ
我の善なるや悪なるや次の下は知るや



可
百

八

本石町の赤峯二
人の食客徳兵衛も
百常陸國は僅

なる知る人何れ我たより行て元手を借りて如何あ
らんとも百重兵衛は進免れ九否のみならず
ぞ其翌日は足せしかは下心ある
重兵衛も百は種々いひ
寄りて遂はわりなき中と
なる

是ぞ海魔のなま
こさみて実
うたてかる次第





重兵衛は百をさしめ濱
 のや小三と着を印のため
 ところも深川なる町へげ
 い春の廣め其日より義人
 のきこふたのくたりいつ
 れの席へ招かれてもせし
 し引を取らなく増々評判
 高くなりぬ又重兵衛ハ善
 かりぬとの事故甲州へ赴り

阿
 百

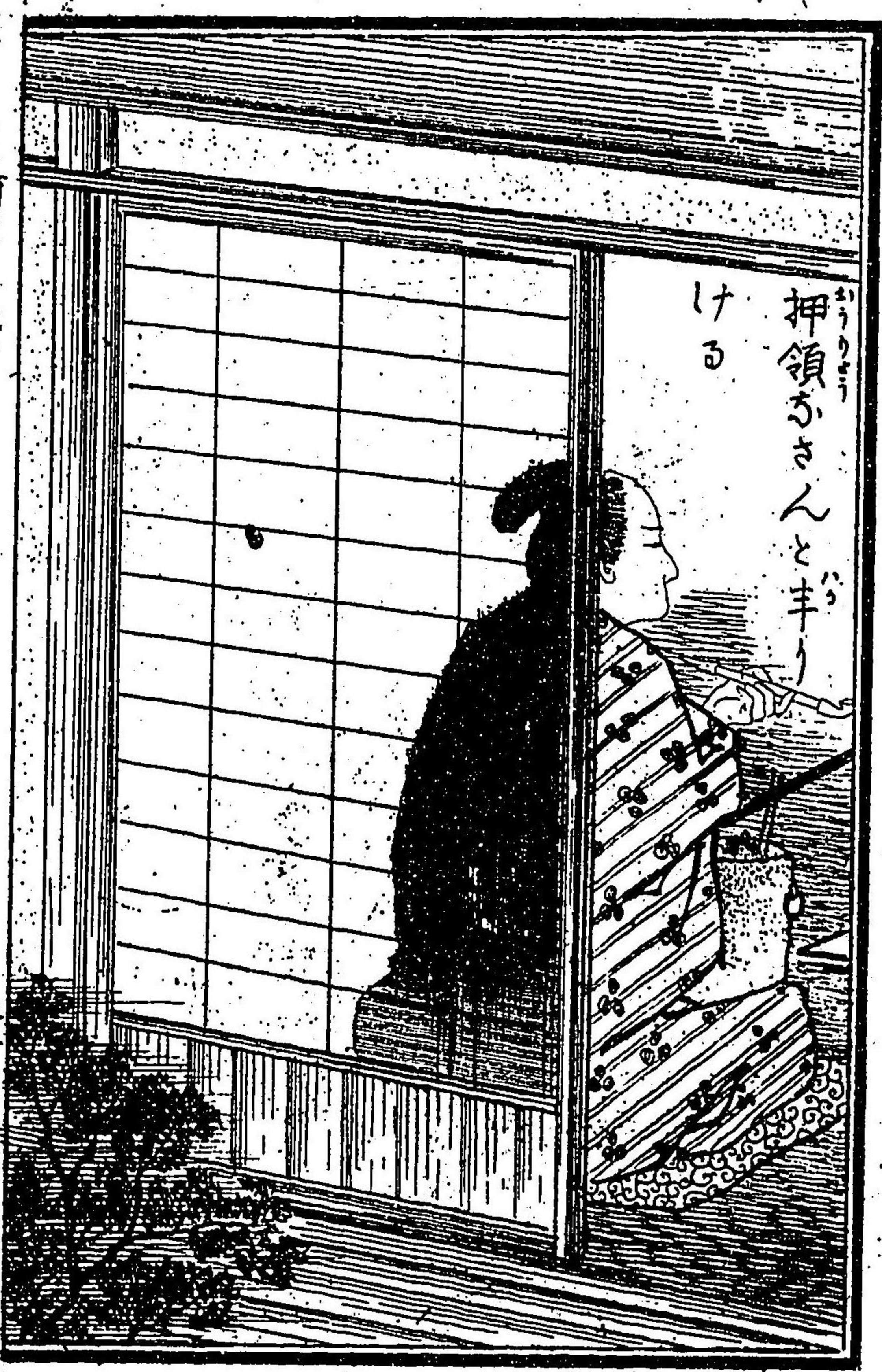
阿
 百

美小秋田
の藩中
中川米女
といふ
君は
ひ
新



深川の
武藏や
彼の小三を招きて酒宴を開き時移りぬ怪へ

海人の怨
美采女小ま
といお百と
深くたらい
て右小秋田家を



押領ふさんと幸
ける



徳兵衛も常陸より販りて本石町へ来てこれをも今他人の
 住となり其行先も定りならに初てお百の衣更を知り
 志涙の暮たりしのかさむ
 へきにけりされま
 身を管買と成果て
 目々市中



を尋巡在日
 深川仲町で今武藏屋へ小三が
 疾へ廻りて小三小合怨みの数々の
 のあししかといは是深き誤故と同夜
 小三六佐へ供ひ種々毒舌を
 やおしてついよとくべいを
 すかールり

漁夫新助ハ徳

兵工の一子徳太 本所て不手

郎を窮苦の中 徳兵工出

し養育なし東 合せす

へ出でんと大夜

の家を片付さ

いつころ決草

今戸の裏長

屋へ細き



〇いさまり

新助も推をか

り宿所をたつ

ねて

右

あを

袖を

ちぬこれぞ

別ちぬこれぞ

煙りの小

日々徳太

郎を供

あひて

尋あ



いてすが

に思

あいの

止か

くあ

れおも

あ

親子が一生の永き

別きと知らさる



お百々今尚

かけ落せんと

衣るいと云

なし籠尊

せざませ田

過る頃

深淵をいで

さびしき六万坪
の辺り



今もきこる

心強くと徳兵工を

せり言しあが

かけを志らぬふりは立まらぬ実



海戸の舟
ありてし
川岸へ
りぬの玉章に
直にかぶふて
芝浦小舟来
止んためと聞て



船中
待及へり
て沖合の元船へ
お百ハ斗れり
忍び



新助ハ
不手にお
百小出合
尚も寝其内
彼のむざ
道入ゆへ
言何たより
事なくも合



近きおふ
時秋永き
敵
百小早
新助
さし付
彼ま生置
ハあしかり
くみに艶箱
を賺

其夜の風雨を
幸と成助を忍ませ
何なくも新助を

殺害なき
十六





中川糸女ハ飯

こゝろなし直小仕

の長ろり

不半お百と

とい七合五にちどろき且喜

い毎夜お百の昏間へ忍ひ尽ぬ

契を誦らいつ尚悪手とほとて

て迷ひ大守を毒殺さし尚軒臣を招き入り

天定りて人小勝故なり哉 悪人等ハ国家老 佐竹大和の奇事ナリ

阿つらき采女を首

悉く割服仰付

れお百

ハ其身の

懺悔して蒸

れ采女名の降

明治十八年八月十日御届

馬喰町三丁目拾番地

編輯兼 網島龜吉

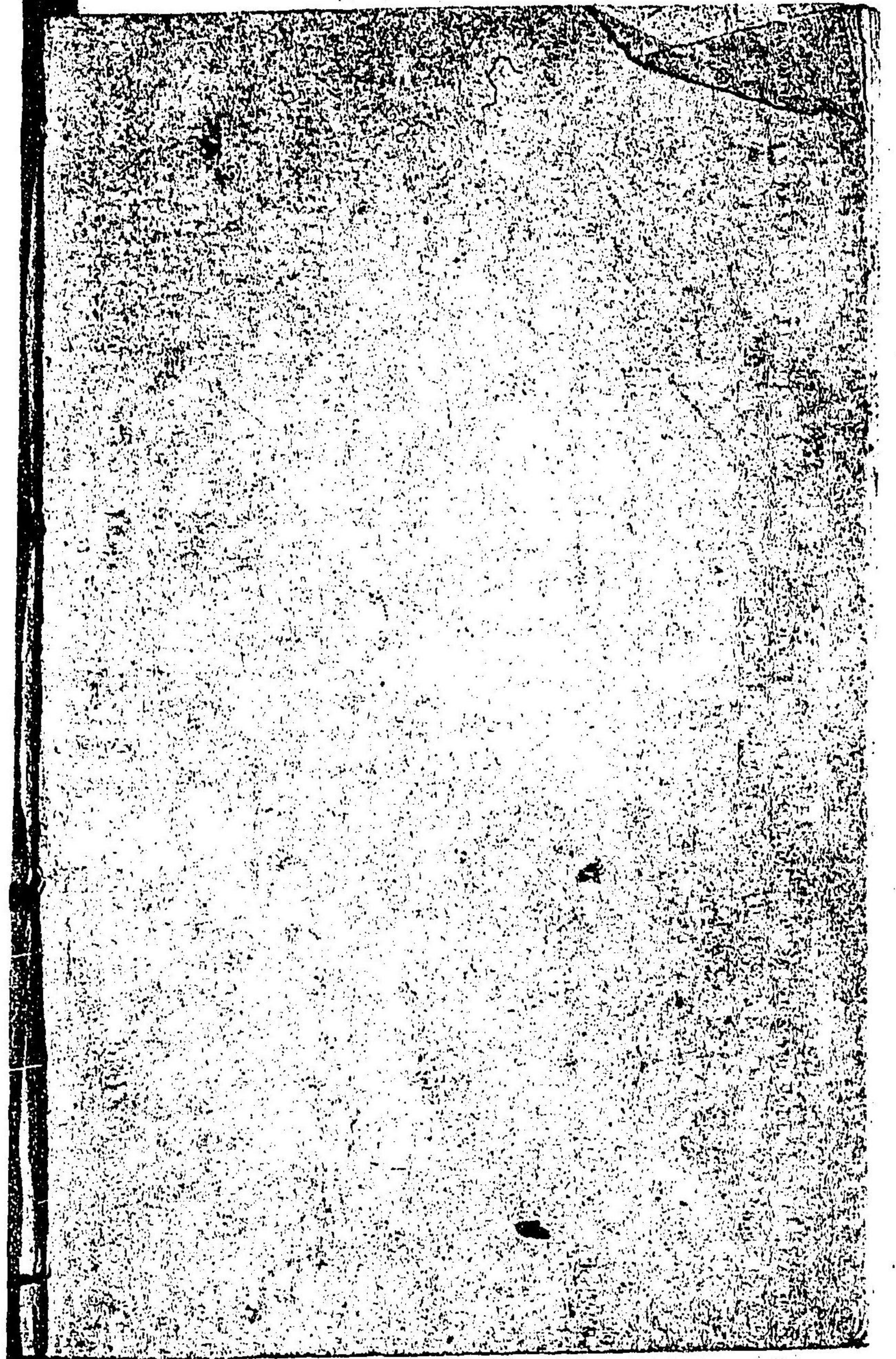
出版人

全く悪人せし忠臣時を得て 國家存続を執せしや

徳太 郎 討たれ今



網島龜吉





1959

913